

## ● 九州

### 西田 紘子

新型コロナウイルスのアウトブレイクから2年が経った。福岡県では、8月に感染者数が1000人を超えるなど年間で3回のピークを記録し、そのつど緊急事態宣言が発出された。しかし、変異株が流行する海外の状況に比して、年末にかけて感染者数は驚くほど抑えられている。新たな生活様式におおいに困惑した昨年と比べると、コロナ禍2年目となる今年は、感染症対策が定着したようにも感じられる。公演会場では、検温、手指消毒、チケットのセルフもぎり、プログラム冊子の設置配布、声出し応援の自粛、分散退場などが習慣化した。

音楽活動をめぐる文化的・経済的状況は持続的な苦境にある。クラシック系音楽公演をみても、客の戻りは充分ではない。休憩中の歓談もままならない。大編成の器楽曲は演奏可能になってきたが、声楽曲はマスク着用や社会的距離などの配慮を要し、合唱作品に至っては依然として演奏機会が僅かである。本番だけでなく練習も、理想的な環境からは程遠い。入国制限が課されれば、運営側はプログラムや出演者の変更へ奔走する。なにより、アウトブレイク直後特有の一体感があった昨年とは異なり、長期化すればするほど、このやり方がいつまで続くのかという不安と不満が蓄積していく。

新しい動きもみられる。福岡市を例にすると、音楽ジャンルの垣根を越えて連携・発信することを目指す福岡音楽都市協議会が始動した。「FUKUOKA STREET LIVE」プロジェクトのもと、まちなかのオープンスペースに発表の場を設け、コロナ禍のアーティストを支援している。また、地場企業の事業継続を促す「文化・エンターテインメントのハイブリッド開催支援金」や、ホールやライブ会場の施設とアーティストへの支援を兼ねる「文化・エンターテインメント施設開放事業」など、市による支援策も展開された。これらを通して、それまでには聴かれなかった場で音楽パフォーマンスが創生し、体験もより多様なものになった。

以下、限られた範囲であるが、耳目を引いた動向をいくつか振り返る。

九州随一のプロオーケストラである九州交響楽団（以下「九響」）では、昨今の逆境をはね返すような新しい動きがあった。定期演奏会の会場となっていたアクロス福岡の福岡シンフォニーホールが、改修および設備更新のため、8月から来年9月までの長期休館に入った。その間、交通の便がやや悪い福岡サンパレス ホテル&ホールが会場となるため、来場者が減るのではないかとの声もあがっていた。そんななか、9月の第397回以降の定期演奏会が、会場での対面公演だけでなく、遠方に住む人々や医療従事者、来場に不安がある聴衆向けにライブ配信されるようになったのである。ライブ配信の視聴券は2000円とリーズナブルで、公演後1週間ほどアーカイヴされるため、くり返し視聴することができる。福岡を拠点とするクリエイティブ・ラボanno labのディレクターが映像編集を行い、オープニングでは昨年初演した小出稚子の「博多ラブソディ」の一節が流れるほか、公演前や休憩中には楽団員の対談「楽談」ははじ

めとする特典映像が配信される。そのため、会場に足を運んだ来場者が、後日にアーカイヴ視聴を楽しむという二重の受容形態も生まれている。このように、ただ生演奏を映すだけに留まらない、地域性を活かした質の高いコンテンツになっている。

こうした新機軸のもと、九響は12月に第400回定期演奏会という節目を迎えた。当初は小泉和裕音楽監督の指揮によるブラームスの「ドイツ・レクイエム」が予定されていたが、合唱の準備が難しく、同作曲家の交響曲第3番と第2番へ変更された。小泉は2013年から音楽監督を務めているが、2022年3月までとなっていた契約期間を2年延長することが今年発表された。楽団との信頼関係も年々強まっている様子がうかがえる。それだけでなく、楽団発展の立役者でもある小泉からは、自身の計画を、コロナ禍で延期されようとも必ず実現させるのだという決意が感じられる。感謝の意を表するために医療従事者90名を招待したこの第400回定期では、木管を中心に九響の充実した今を全国に届けた。

昨年3月には念願の東京公演が予定されていたが、こちらは諦めざるをえなかった。しかし今年の年末には、日本オーケストラ連盟が主催する「オーケストラ・キャラバン」の一環で、兵庫県西宮市での公演（沼尻竜典指揮によるチャイコフスキー・プログラム）を果たしている。今後も、福岡の外、九州の外での公演を積み重ねていくことが期待される。

人が集うことを前提とする音楽活動。そのうち音楽祭に目を向けると、長期にわたるだけに、感染症対策の苦労もより大きなものとなる。別府アルゲリッチ音楽祭、宮崎国際音楽祭、霧島国際音楽祭など、九州には国際的な音楽祭がある。国際的な祭であるだけに、昨年から中止や延期、縮小といった変則的かつ多種の対処を余儀なくされている。長い歴史を誇る霧島国際音楽祭では、「ここで音楽を絶やしてはならない」という堤剛音楽監督のリーダーシップと運営側の熱意によって、半月にわたる開催期間が充実をみた。対面公演はもちろん、キリシマ祝祭管弦楽団を過去に指揮したサツシャ・ゲッツェルと本年の指揮を務めた鈴木優人の配信企画なども、受講生にとって励みになっただろう。多くの制約を課されながらも、一期一会の体験を共有する忘れがたい時間が刻まれた。

2020年にスタートする予定だったくまもと復興国際音楽祭は、今年ようやく本格始動した。熊本県山鹿市にゆかりのあるケント・ナガノをはじめとする海外音楽家は、残念ながら来日できなかった。だが、篠崎史紀音楽監督を中心に、熊本ゆかりの音楽家や、九響やNHK交響楽団のメンバーが集まって稀少なコラボをくり広げた。予定していた中高生の参加は断念されたが、合奏練習もままならないなか、三ツ橋敬子の指揮による特別編成のオケがフィナーレを飾った。

コロナ禍における子供たちの持続的なストレスも懸念されている。福岡市では、1月に福岡ジュニアオーケストラが第1回定期演奏会を延期の末に実現させた。市待望のジュニアオケ誕生に、佐世保や大分など各地のジュニアオケとの活発な交流が待たれる。一方、iichiko総合文化センターは、おおい障がい者芸術文化支援センターとの共催で、手話通訳、イヤーマフやアンテナなどの鑑賞支援つきのオペラ・コミック公演を5月に実施。ホールでの音楽公演から疎外されがちな層のアクセシビリティを高めようとする本企画は、九州では先進的な事例の一つである。来年もコロナとともに歩むことになるだろうが、連携と支援が持続し、音楽活動の間口がいつそう広がる1年なることを願う。